

旗本妻木氏 幕府御薬園陶器

妻木氏が治める土岐郡妻木村(現土岐市)は、幕末には窯が10基あったと記録されており、私領の中でも窯業生産が盛んな地域でした。

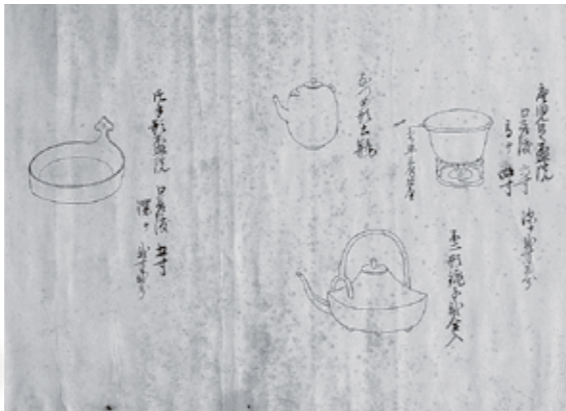
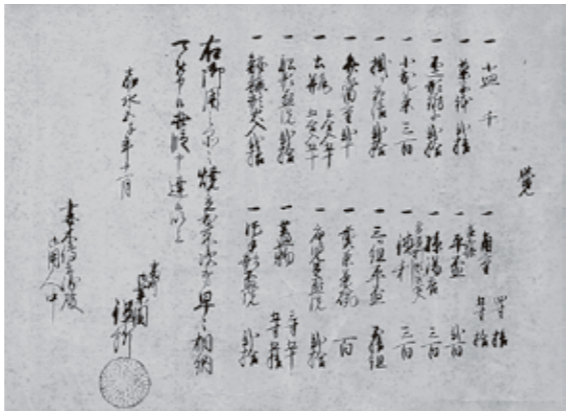
妻木では、幕府の御薬園(番町御薬園・現東京都千代田区)から御用焼の注文を受けました。幕府や公家などから注文を受けて生産する陶磁器を「御用焼」といい、細かな注文に応じられる高い技術力が求められました。生産者にとっては、御用焼と一緒に焼いた余剰品を江戸で売ることによって収入が得られるといった利点もあったようです。

妻木陣屋(代官所)の日東千左衛門は、御薬園御用獲得のため、妻木焼の由緒書を作成し、御薬園に提出しました。そこには、江戸時代初頭(17世紀)の江戸城普請にあたり妻木から瓦を納入したという、300年以上も前の実績を盛り込み、証拠として窯跡から拾ってきたと思われる瓦2枚と一緒に提出したようです。その甲斐あってかは分かりませんが、無事、嘉永5年(1852)に御薬園から注文を受けることができました。

左：染付波千鳥文富士形銚子
右：御薬園注文書(部分)
妻木公民館郷土資料室蔵



御薬園からは右のような注文書が出されます。左の銚子は妻木に残されていたものですが、注文書図面(右下)に描かれた「不二(富士)形銚子」と同じ形状をしています。



旗本馬場氏「小名田徳利」

馬場氏領の可児郡小名田村(現多治見市)は、徳利生産の盛んだった久尻村高田郷(天領・現多治見市)と隣接しています。小名田でも徳利は生産しましたが、幕末、良質な陶土を産出する高田での生産量は小名田の10倍ほどもありました。馬場氏は、江戸での徳利需要に目を付けて徳利を特産品とし、小名田から江戸へ販路を開拓しました。

高田は天領なので、本来、出荷は美濃焼物取締所を介さなければなりません、相当量の徳利を小名田から出荷したため、高田産の徳利も、江戸の商人からは「小名田徳利」と呼ばれました。



高田大ザヤ窯出土の徳利
左・中：江戸時代、右：明治時代
多治見市教育委員会蔵

文字が入るのは明治時代以降

旗本林氏 根本焼

林氏領の可児郡根本村は、江戸時代後期まではほとんど窯業生産が行われていない地域でした。天保年間(19世紀前半)に高蔵寺村(現愛知県春日井市)出身の坂崎小助が来て磁器生産を始め、嘉永元年(1848)に代官坂崎源兵衛の政策によって、林氏の御用窯となったと伝えられます。坂崎代官は新田開発や瓦製造など、積極的に産業振興を行いますが、嘉永5年(1852)に領民に暗殺されます。

根本というと、淡青色の呉須で美しい絵付が施された「根本焼」で知られます。これは、明治時代に入り、小助の息子周助の代に作られたもので、高級食器として流通しました。



根本焼 漢詩文蓋付碗・唐子文生盛皿
明治時代後半
土岐市美濃陶磁歴史館蔵

土岐市美濃陶磁歴史館企画展

「お殿様のお美濃焼生産ー維新前夜の私領ー」

展示期間：平成30年6月1日(金)～9月9日(日)
入館料：一般200円(150円)、大学生100円(70円)、高校生以下無料 ※()内は20名以上の団体料金
障がい者手帳をお持ちの方 一般100円、大学生50円
開館時間：午前10時～午後4時30分(入館は午後4時まで)
休館日：月曜日、祝日の翌日(ただし7/16、8/12は開館)
編集：公益財団法人土岐市文化振興事業団 春日美海
岐阜県土岐市泉町久尻1263 TEL.0572-56-1245

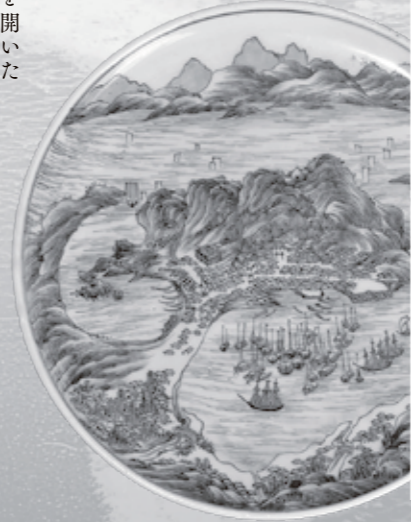
- 【主要参考文献】
岩村町役場 1961『岩村町史』
小木曾郁夫 2010「近代の美濃陶磁ー根本焼の展開ー」多治見市文化財保護センター研究紀要第10号
岐阜県 1916『岐阜県産業史』
熊谷博幸 1973『安政年間「箱館焼」資料』
熊谷博幸 1982『安政年間 箱館焼の解明』瑞浪陶磁資料館研究紀要第1号
河野典夫・岩井理 2006『萩の島窯跡出土遺物の詳細報告』瑞浪陶磁資料館研究紀要第11号
市立函館博物館 2001『特別展 幕末の箱館と幻の陶磁器ー箱館焼の世界ー』
多治見市 1976・1980・1987『多治見市史』窯業史料編・通史編上・下
土岐市 1971『土岐市史』2
北海道庁 1918『北海道史』
瑞浪市 1972・1974『瑞浪市史』史料編・歴史編
瑞浪陶磁資料館 1991『特別展 萩の島焼』

【謝辞】 岩村歴史資料館、恵那市教育委員会、多治見市教育委員会、妻木公民館郷土資料室、天猷寺、土岐市立駄知小学校、函館市中央図書館、宝珠寺、瑞浪市陶磁資料館 (個人のご芳名省略、資料の所蔵先は公的機関のみ明記)

お殿様の美濃焼生産ー

維新前夜の私領ー

陶工は函館へ渡り、旗本は江戸へ販路を開いた



はじめに

19世紀初頭(江戸時代後期)、美濃窯で磁器生産が始まり、江戸での大きな需要により窯数や生産者数が急増していきました。美濃窯での生産の中心は天領(幕府直轄領)で、笠松役所の管轄下で美濃焼の生産が行われました。天領内での生産には「窯株」、販売には天保6年(1835)以降、美濃焼物取締所が発行した「仲買鑑札」(仲買株)が必要となりました。

しかし、美濃窯内に点在した私領(旗本領など)には天領の規制は及ばず、独自の生産と販売が行われました。私領内での動きは天領側からみると不都合に映り、しばしば軋轢も生みましたが、幕藩体制のほころびが見え始める江戸時代の終わり頃には、私領内、つまり「お殿様」の治める領地では産業政策としての窯業生産がひろがりをみせていきました。

岩村藩

恵那郡岩村(現恵那市)を本拠地とする岩村藩は、幕末には大給松平氏(おきつまつだいら)が治める3万石の大名でした。文政9年(1826)から家老丹羽瀬清左衛門による藩政改革が行われ、新田開発や織物製糸業の導入など産業振興策が取られました。しかし、強硬な手段によって領民の反発に合い、この改革は失敗に終わり、藩財政は改善されませんでした。その後も幕末まで財政再建策を模索し、美濃焼販売も1つの手段としていたと考えられます。

駄知土瓶(能登様土瓶)

岩村藩領土岐郡駄知村(現土岐市)では、文化元年(1804)頃に塚本源右衛門が土瓶生産を始めたこととされ、岩村藩が藩政改革の一環として天保元年(1830)に長谷川平七を陶器方に任命し、江戸などへ駄知土瓶の販売を始めたことと伝わります。藩主松平能登守にちなんだ「能登様土瓶」という名も残ります。

染付箱館真景図皿
安政6年(1859) 瑞浪市陶磁資料館蔵



松皮土瓶
瑞浪市陶磁資料館蔵
ピカンナという技法によって付けられた文様が松の樹皮のように見えるもの



糸目土瓶
土岐市美濃陶磁歴史館蔵
ロクロの回転を利用し付けた同心円状の刻線が入るもの



吹絵土瓶
土岐市立駄知小学校蔵
吹付による文様が入り灰釉が掛けられたもの

幕末の東濃地方



※村領領域と支配領域は現土岐市と多治見市の範囲および釜戸村の範囲のみを記載。岩村は大きな位置を示しています。

